

今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の善性を見つめて言葉にしましょう

親のまちがった心が、わが子を損そこなう

多くの子供たちは、親がまちがった心の波を起こし、まちがった言葉の波を起こしているために非常に損そこなわれているのであります。多くの人たちは、子供を愛するあまりに悪あしきことばかりを見つけて、「お前はここがわるいのだ」ということを始終しじゅう言うのであります。そう言われるとその子供は萎縮いしよくしてしまいます。そういう子供は、たとい勉強は辛かろうじてよくできたにしましても、大いに伸びるということとはできないのであります。「勉強

しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、やむをえず「お前はそんなことではできないから勉強せよ」と言うのだという人があるかもしれないけれども、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖くぐせのように言うのと、いくら勉強してもかえって心に憶おぼえないのであります。これはまたおかしい現象であります。原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」と言うような親は、子供に対してどういう心の態度をとっているかといえます。「お前はどうかがわるいのだよ」という考えを懐いだいているのであります。できるに定きまっておれば、「勉強せよ」とは申しません。「できがわるい」と信じているから、「勉強し

ろ、勉強しろ」とこう言うのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30巻12～13頁〕

「うちの子供はできが悪い」と思っただけでも

「うちの子供はできが悪い」と、言葉に出さなくとも、心に念おもうだけでも一つの波を起すことであります。親または教育者が、心の中で、「この子供はできがわるい」という精神波動を起こしまして、その子供をそういう心で見つめているかぎりには、その子供は決して学習がよくできるものではありません。勉強室にいまして、勉強しているような真似まねをしておっても、心は親の心で縛しばられておりますから、勉強が愉快ゆかいでないのであります。そういう場合には、勉強室すわに坐すわっておりますと、なんとなしに窮屈きゆうくつな、縛られたような感じがいたしますので、その窮屈な中にいるのではのびのびと生命が生長しませんから、そこでいくら勉強しても深く心に愉快ゆかいが刻きざまれるということがないのであります。そのためにせっかく勉強

強しても能率が上がらないのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30巻13～14頁〕

断定の言葉ではめる

この間も私の宅たくへ一人の奥さんが、尋常六年じんじょうになられる坊ちゃんぼっちゃんを伴つれて来られたのでありますが、その奥さんのいわれるには、「先生、この子はもう六年になりますのにちっとも勉強しないのでございます。それに乱暴で、こんな乱暴な子はありません。先生、どうでも少し親のいうことを聞いて勉強するようにいいきかせて下さいませ」といわれるのです。それで私がいったのであります。「おくさん、それは大体だいたいあなたが悪いのです。第一、子供を眼めの前まへにおいて、子供の悪口あくぐちをいってなんてことがあるものですか。子供の善いところを見てほめなくてはいけないのです。奥さん、この坊ちゃんぼっちゃんの顔を見て御ごらんなさい。なかなか好よい人相じんさうしてるじゃありませんか。どうです。西郷隆盛せいせうりゅうせいによく似た偉い人相

をしている。ね、坊ちゃん、あんたはよい子だね、西郷隆盛よりえらくなるよ。きつと偉くなる。今日からお母さんのいうことを聞いて、きつとよく勉強するよ」と駄目を押すようにいったのであります。よい子になる、だろ、う、といわなくて、きつと善い子になる、というのはつまり断定の言葉であります。断定の言葉はよくきくものであります。言葉で駄目を押してしまふと必ずその通りになるのであります。さてその夜から、その子供の性格が一変してしまったのであります。今迄夜分寝る時など、洋服もズボンも、めちやめちやに放り出して寝るのが常でありましたのに、きちんと洋服もズボンも枕頭に畳んで眠むようになったそうであります。私は何も洋服をたため、とはいわなかった。ただ「お前は人相が好いから出世するにきまつてる」という言葉をいっただけで、そういう有様が展開して来たのであります。お前は神の子だとまでいわないでも、西郷隆盛に似ているというだけでもそうなって来るのであります。別に西郷さんが、洋服をきちんとたたんだというわけではないがとにかく、

「自分はよい子だ、えらくなる」という自覚を得ることによって、自分の内に宿る善い性質が形に現れて来ると、勉強の上のみならず各方面に善さが顕れて来るのであります。子供は親を尊敬していますから、尊敬している親の言葉は最も強い具象化力を有っているのでありますから、皆さんも、せいせいお賞めになって子供の内に宿る善さをお引出しになることを希望致します。

(新編『生命の真相』第22巻49～51頁)

どの人もみな「神の生命」を宿している

人を見るのにその外見をもつてしてはならない。人間の真相を見ると云うのは、人間の肉体や衣服は仮りの相であつて、「人そのもの」ではないと云うことを知り、その奥に宿っているところの「神の生命」(仏教的に謂えば「仏性」)を観ると云うことなのである。何人も神の自己顕現として、自己の内に「神」を蔵しているのである。これこそが「真の人間」であるのである。そし

てその「内部の自己」が「神」であることを自覚し、それを尊敬し、その如く生きようと努力するとき、自分の性格も環境も健康も改まりはじめるのである。そして他人の「内部の自己」が矢張り「神」であり、完全であることを心で一心に観て、それを尊敬し合掌礼拝するようにするとき、その「他の人」が礼拝されるに相応わしい立派な人間となって顕れてくる。

(新装新版『真理』第2巻142頁)

悪があらわれても悪を見てはならない

若し誰かが悪いことをしたと云う報告が来たならば、すぐその人を悪しざまに思うことなく、又、叱ったり、怒鳴ったり、罵ったりすることなしに、「悪く見えたその相」は仮りの相であって、実相ではないこと、彼の実相は完全円満であって決して悪い事をするような人でないことを、じつと心に描いて念ずるようになるのが好いのである。やがて彼の悪い相は消えて完全な相があら

われ始めるのである。若し何か面白い事件が起ったならば、「今はあの事件は悪いような相をあらわしているけれども、あれは途中の経過であって、必ず良くなるより致し方がない」と念じて、最善の努力を尽すならば、その事件は必ず好転して、好い結果を生むようになるのである。併し事情が好転するように誠心をつくして努力することを忘れてはならぬ。

(新装新版『真理』第2巻142〜143頁)

子供の「神性」を認めて拝むような気持ちで

子供をよくしようとするには、児童を頑是ないわからず屋だと思わないで児童の神性は必ずや善を理解しうると信じて道理を説いて聞かすのが一番良いのであります。道理を説いて聞かすということは小言を言えということではないのであります。道理を説き聞かす場合にも、こちらが興奮して棘だったような顔つき、語調をして話すならば、言葉は道理を説いていても、それは叱責

となり、かえって反抗心を昂めてなんにもならないのであります。道理を説いて聞かすといふことは、相手の中に道理が宿っていることを信じて拜むのであります。子供は神の子であるから「神」すなわち「真理」であり「道理」であるから子供の中には必ず道理が宿っているのであります。子供に宿っているその道理を拜む。

拜む気持になって尊敬しつつ柔しく道理を説いてきかさねばならない。「あなたは神の子である、善の子である、道理の子である、真理の子である、あなたの中には善があるんだから、善をなすのに極まっている」と、その神性を認めてその子供を拜むような気持になって、静かにその宿っている道理を引き出すようにして話しかけるのであります。いくら叱りつけて恐ろしい語調で道理を説いても、それは相手のうちに宿る真理すなわち神なるものを拜んで説くのでありませんから、子供のうちの道理、真理が出てこないであります。同じ道理を説いても、相手を尊敬しつつ説かなければならないのはそのためであります。「きさまみたいな奴は人間

じゃない、道理はこうだ」といって話したのでは、その子供の中に道理が宿っておらぬと輕蔑心を起こして、内部の神性、仏性に蓋をして引き出そうとするのですから、その神性、仏性が出てこないのです。児童を良くするには、その神性、仏性をまず拜むのです。拜めば扉が開かれるのです。

〔「生命の實相」頭注版第30巻85〜86頁〕

